初學和歌式

讀方詞等

三

○秋

立秋

立秋ハ秋ノ初ノ日ノ名ニテ立春ト同ジ秋立日ノ名ニテ
物ノ枯ルヽ草木ノ色ヲ見テ人ノ心モ秋ノ心ニ成ルヲ
ト申シ又ハ草染ノ家ニハ草ヲ刈ル日ト申シ又ハ
又萩ノ祭ト秋ヲツカサドル神ヲ祭ルヲ申スナリ
ノキノウヘニ立テ松ノ声ヲフキヲドロカスナリ
表ハ立表ノ名ニテ
秋ハ陰気ノ初テウレヘヲ以テ時節ナレバ立秋ノ名ヲ
モ物ノ枯ルヽ
ヨセノ初ノ名ニテ
ハツ秋ハ萩ノ
秋立テ五日ノ内ニ
立秋ノ内ニ
ハツ秋ハ立表ノ名ニテ

初秋

早秋
新秋
秋来
早涼

「初秋乃部ニ同じ
「立秋の心ともなる也初秋の心にても行
「炎秋来なといふ類ハ立秋乃心にかよへり
「早涼至なといふさぐひハ心ハ秋くるゆへ涼しきを
なるといへども初秋乃心なるへし
よ世乃細松吹風荻の上風扇ともいへる

七夕

「かゝれざるとひこりしといひめさふかき流とらひあといふ
七夕乃字とよむは八七夕乃夜と下男乃夜の心によりてなぞて
らん七夕乃心とさしてよむへし 或ハ中れにあふよのつら
れさといひ或ハ放つりもしらずといふべくもとそいふ
乃ふまらつゝそハくるゝ乃とまた川ハいふまくるゝ かりひと
おりひ年に一夜乃契りなれバなど長き夜に逢ことを
しても初秋のこゝしく夜にあひことそあるんともならむ
ときかあるな嘆乃なられとさへしくさの舟ハわらちく
世かくともよあり文雅ひの糸とハ竹のさはりに五色乃

糸とりまりて七夕にちまりてまらがんとすとふとといのりは
るしきかた衣類をつ八ぬのさゝひなとふりても七夕ゆゑ
し梶の七葉といふ六ちぢの心に和哥なとをりてよ向
也家ともといふハ七日の朝芋の葉に露をとり寄を染て
それにて梶乃葉に物かくとえ かくさしてきさ乃橋といふ
今我天河にあるのかさてきまりて羽をなかべて渡をと
いへり七夕ハかさてきの橋とわたりてあふよしともいひ文
ハ天川と舟にて渡るよしともいへり
よ世の細天川かさゝぎのはし 紅葉のきしとらひ逢瀬
かゝぬ契ちぎりかハらぬ年の契りハ年れあふ瀬
やものこふに八十の舟津年に一夜つまむかへ舟いは楫
衣とりとかひらの云の露あるあふ逢ふ文雅ひの糸ハ衣とり
もと天の玉床は宿枕

乞巧奠

「七夕まつりハ庭にとりひそろそて香をさとりかく
乃物とよ向て星をまつるし

芒萩

「芒萩ハ萩の物ゝさの弱し或ハ麻ともちがひとうぬれとしひ又ハ涼風とゝろ風れどし古歌判部ハ芒萩の風ハ必しも芒萩とハ美ものゝ〜しも見し侍ゝもとあり芒萩ハ萩かぞれとゝなゝ〜ろゝやゝひぐゝろ萩などともゝゝ又ハゝぐ萩とばゝりいひても秋のゝとゝぜてゝろゝもあり物して芒萩ハ花乃季よもあれと芒ハ萩よりもゝろハ秋し

「かさ乃ゝ乃ハゝぐゝ花とゝゝ会せゝゝ萩ハ花のそゝゝぐ物ゝ衰ふゝさ抽ゝされハそゝゝとゝひゝお遊萩かど乃さゝりゝ長ゝゝゝやゝゝ花ハゝゝ物ゝさされどさひゝさやどなどゝ乃ハゝて友となゝやゝゝゝゝゝもあり又かぎ乃芒のそゝぐゝと人のゝろゝよゝゝゝてもゝむし又ハかさの花ハゝ花の芒ゝ乃ゝ物ゝれそ

萩

物ゝゝともゝゝゝゝゝゝり
ゝゝ乃紅ゝゝぐ花ゝゝゝ花ゝゝゝ花のゝど
ゝ芒乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝき芒ゝゝ花

「萩の名ハ花乃さゝり花ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
萩ゝ花とゝゝむゝゝ萩ゝハ芒とゝゝり萩ゝひゝゝ
とゝゝハ萩のさゝりなゝ中とゝゆゝハ絲のゝゝ乃
紐ゝゝゝゝとゝゝ萩のゝゝさハ絲ゝさゝゝゝゝゝ
萩の戸とハ藤帯ゝゝあり萩ゝ芒芒とゝゝハ萩ハ麻
乃麦とゝゝ子細あり又ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ萩ゝ鹿のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ廣乃萩とゝゝゝ
てゝゝゝし鹿のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
れてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝる名ゝゝ
ゝゝ乃紅ゝゝ白ゝゝ芒ゝゝゝゝゝゝゝゝ鹿のゝゝゝゝ芒

[illegible]

女郎花

[illegible]

証 尾花

[illegible]

芍薬

[illegible]

蕙

[illegible]

菖蒲

秋夕

又くもかくれといひてかくろへくる人なしやまとかくし玉
まくくもそとハ紫末のまさかさかなのごとくてゆかし
大称着の春ハ風とよきあはれなり又秋とも
よせの類ハうらむるゝうつバ念つく玉まく歸ゆ
〽寂蓮秋夕とて定家乃歌出てハとふ大切乃歌にて
よびも秋夕の歌ハ秋の哀さはまりて八世もこゝろし
くみもあはれなく物思ひをはなれる悲しきよむが
お哀しされバとてものゝあはれしくあはれぐしゝう
ぬるれともいふんもくなるべし又こゝろて秋の哀
きんといふんとせざれども哀氣なとよくくのひ
さびしさハそのつらき秋の夕人もそなたるとく句ん
うちなりけしとく洗心もとべき歌とて秋夕の心
らひあはれ風物哀しさみ夕乃ことといふやうに
らうらも心哀ふ出ハあらぞ或ハ風乃とともしのね
ふつくそても物さびしくきこえておなじこゝろ

霧

末乃霞まで也いはでく秋の霧もたちいふあへぬん
なすときぬくあるべし
よせの類ハひしき物思ふかなしき秋ゆふくるゝ時
〽霧ハ秋三月とも中にあつし霧乃さかりといふハ八
月世中紫中ふかくときれくせうとぬしさうしびハ風
ようくろうとむ乃絃とゝそこゝろしこらぶひ新
夕ハ日さて玉簾うんなどお哀し又のらくの吉むむ
みとりる秋もよむべきしされと荻まよ世おとされう
うちとそてやくも世ハ霧ハよせ物まなりて荻蕗の
おまうたうべし傳歌よなししらやうまんなかひ
もべきし紫のちり霧と八草の根より露さこゝへよろし
よせの類ハ玉ふかくむさぶ荻ふる紫のちる玉

野分

〽のわきハ八月乃風の名也暴風とうさてあらき風也
ときさ乃風ともいひのわきとハうちもよむし野分とい
といふと一説ニ野分めぐる風といふこゝろのときハ

雁

ご川と濁りし　野分の吹立ぬの時ハ三河をさしてかむしし
大方吹くらん又用る也なほよくむかし秋人乃茶木も少き
こぶり雁のさうきれぞかの多くもされたるれふして
なれ雲も立ちよふ秋式ハさの中すでしぐるゝよらぐ
しやどもすかまでされらんそよありいふにも風のあ
らましき秋おしき源氏物語のまゝされをも出てよある
なかなかし

よせの秋吹吹をぞろ吹あく吹て後は河吹しなる
なくなくなびきふき茶

一八二月乃なるに家にかりて八月ならバにくろとしるの
十五夜の月によりて合せたる句もあり一人のなつさとも
ハ一の月ひつけれさればら文字がる似たる又さるを
づきとたてきこへんといふ六のもろこし乃蘇武といふもの
胡國にとらわれし時の雁乃あしに文をつけて古郷
にやりてあるといふことあるべしつかなまとよむ

ハ一句ならといふふんしよつて古来にもたつかりまそさ
こ語なりといふ事一句ほど青に用ひさり又ある事こ
いひたく又秋とよめる句もおほし此時ハかう事ハ只一句と
いふんぞ青乃秋の一句のいつといふハつなるへし夜か
月の事といふハ秋夜をさしされハ夜と侍と秀句よりぞ
一句のたとへといふ六まとを不変のあつまてハあるべけれ
鳴るといふによりてなまゝともいふなるへしあるまと
ふ一句と八景とふんし又舟にゝてふる句もあるに句の
鳴声とうろれ声に吟なしたる句もあり又ハ篇なまゝ
さてさるもあり又やさ田かる事と八一句のくるいハ見さ田
かる吟かれハ秀句によしとすねかる事とも一句の句
ハ大秋京氣のふしされと秋のなきさ宮を稀さめの扉
に声を吟て感とりよる次なともなるる又いつしうと
結なさるゝも相恋し搗衣月によき合せたり
よせの秋くる鳴まろ一流ついくつ称うらハし歎と

鶉

鴨

虫

松虫

鈴虫

蛩

〽つゞりさせてふといふハこほろぎの鳴声によりてなし　させてふむしともよめり又こほろぎをハつゞりさせといひ家ちかく鳴ゆへ枕の下に鳴たりといへり詩経の豳風に七月在野八月在宇九月在戸十月蟋蟀入我牀下と云よりいへり

轡虫

〽くつわむしハ馬のくつわの音によく似たれバ名付たるよしにてくつわむしの音によく合せひゞきやつゞれハ也とあり

促織

〽はたおりむしともよめり機織によく似てなり

鹿

〽鹿ハ妻こふ声とあはれをそへて鳴声に感とりしハひとりね思ひ式ハ春明の月に鳴声をあはれと詠し紫のそよくハ秋西と鹿の心をいかやともいひ吹くる風につくしもこゝに鹿の音をさそひ古今集に鳴声に秋と詠りし花乃錦きめのあはれそふるとなしといふべくし鹿ハ夜鳴声のことにあはれふかきや又夜なかくでもなくしよしと詠む合夜鹿

さそくにもあきの月　き秋風に鹿しかねとり鹿の鳴次

駒迎

佐判 後京極院よろしともなきこゝろといふて萩ハ鳴やまぬゆゑ人鹿ハ秋になりぬれバいつも鳴ものなりとて　よせの詞に鳴ハ声妻こふ妻とふそよく　そよく荻を詠あはれむ萩むすびけ山下にも鳴鹿ふる歌に

〽駒むかへハ八月十五日に東の牧より禁中へ奉ると云主人のむかひて名を立てるまとり禁中へ引て牧ハ望月の駒きりハらの駒かぶちの駒あぐらの小坂立野の駒ハ外甲斐の駒引武蔵の小野ひきなりとゆきも日ハ八月十五日ハりち月の小坂とひろくわしも八月十五日ににまかれハ月にそむいてうむわ坂の関の清水に影見えてといひ関の杉村ひく駒かともよむと関の雲がくれなりともいへり又あ路とおもてそめてよひわ坂まてハさわらんとも又八雲みの庭にひくともよめり

よせの詞引ひきとけ関立いづる影見えて秋の下た

一挿頭抄夷孝法印云三日月ばかりの夕ぐれの夕をさしていふ月
安楽院人夕月秋月のはじめにて八朔比の夕月夜
なりとく源氏物語にもくれバ月の出ぬほどなりて二日の夕
よりも出侍るといふ明ぬへ人は十日頃の比までも
言葉にいづる程の月を夕づくよと云なりとハいへし
「上弦月 弓はり月とよむ 八日七日八日九日比夜三夜の中そうして
本月にもしなどよむ也にて人よみ月十五夜にて下弦
もよまれて十四日五日六日ばかりの月人満月のころ
源氏雲隠の月は有明の暦の法の記には後をさるの
一上人むかしのそびよりて下弦月と云 不知夜月八十六日よ
私云弓月八入日と月の出の和し
てよく世に月にかはれぬとも言もうらまかせて
の心ある人 私曰弓とひとかはれて云のハいさよひといふらし 立待月十七日より子
細同居待月十八日より人子細同名婦待月十九日と
いふなりけり人源氏物語女三の宮の日云十九日ばかり
とかく人所待の月を詠ぬまし出るかりくなりと

人彼臥妄夫目ばかり月十九日なり宵闇の人らんおほ
ゆるき詠侍ありて出なし人廿日月安楽院人下弦月
廿一日二日三日の月半月まうし人程のるまま人 有明
月は晩月にて待いづる宵の月にて人又廿日よりの内の月
とも新月に及べば有明に中つきとし先近々されし人
一月おの寒哉月はといそぐる凱りてく有りて別あり
近衛風林云宗月有常月しるならりといへども月
おの凱にて夜秋の月入て後の月かと三みれ
八寺月とある凱にて八眼おもしろ月いやしの及び之よ
て後の月名残の月又いそね月をうつさまにいふもくらし
るむ月おといふま八眼おもしろ月なるそく八あく
入て後の月夜秋の月などハ新といふかんし
一八月十五夜の月ハりむかの月秋のなかり八秋のことおま
あり月などいひて相叶し
一九月十三夜ハ去月のことよひ後のこよひともよむ文

菊なとゝともに合てとりひといへる十二枚し古哥に
ハ此あしらひなき事もあれどさてくるしからひ
てハ八月十五夜とかりなりけれバ名月といふ時ハあひ

一 おほ月といそぐる歌ハ数へかぞへて出る月といふ古事の
月ともいふ又出るともあり

一 月の都といふハ月宮殿て又此都ともいへる事あるなり

一 月の桂といふハ兼明苑曰月中桂長二百五十丈月轄中ニ有
下ニ有河此木秋花開らってとゝといふハ叢天論曰
月中ニ仙人桂樹有物生仙人の足骨功又或説ニ須弥山の南
になんえんだんといふ木ありて其の木の影月にうつりて
桂となれりとも云 古今ニ
秋くれど月の桂のミやハなる光を花とちらすばかりを
これより月の光を花によそへてよし又月のかゝハ
白氏筆なるやうにもあり
月のかゞみ月の衣月の鏡なとゝハかそへていふべき

霧

すべて月とよむ時ハ多くいづるとよみて入る事ハ
まれなり就中としく入るの月にハ山のはをそへ或
ハさそふひと待よふしきしのびし行末のえを
おもひ我世の行秋とうつし或ハ忍の情をのへ述懐の
心といひ哀傷によせ神祇て人数の事にもなぞらへ
たとへ月のことによせてといふとなし
よせの羽 新光照とさぞふつどつ入るにつく
霧ハ秋を立てそれともさぞうにくしぬ心とよむ歌
或ハ世への手様も霧をとめてそれとまし様ど香に白に
ともなり人の笠の内もそれとなねど影ばかり近て
心又ハ浦への行来もきゝねとうがられとに被ことあり
汐やのくもりもわかれぬんなにとよむし又秋の山とさ
れバ出る前日ふる根の霧ハ晴ておりしやる川社とも
よむし霧ハ気を冷まさひとるべきし
よせの羽ふらふらひろなびくべきつかりハ暗る

稲妻

秋田

いなづまをとゝむるは稲葉乃上のよゝ世まの葉の面のあまつゝ
しもをべて光とゝかゞやくれんとゝろ〳〵つて世の
なかれきよとゝ（又は人の心乃あさなるみゝそふるひの
いなづまといるは夕やゝの光なゝとゝ丹京氣かりゝれ
れがなるべし又は枕ゝゝふかゝとゝいふは寒とゝいふよ
りてなり
よゝ世乃羽照とゝやゝろやゝろもあ〳〵稲のゝ〳〵てゝいふ
だゝふやゝるかゝらふひゝゝ氣心のゝふゝゝゝ
〈秋田とゝゝしよは天ゝくゝとゝよ秋風の寒ゝゝ
故氣氣をいひゝゝ乃ゝも秋をみなゝてゝゝゝ
ゝんなゝゝとゝ川て鹿などゝゝゝとんゝもゝひ秋風
吹ゝひゝでなゝゝゝもつゞけ稲葉の丹とゝゝ法の家よ
なゝゝゝてハゝゝる秋もいゝゝ寒ゝきゝゝもいふ又ハゝゝ
ゝきゝゝる此ハ織ゝ門田もゝゝきとゝめてゝきゝひ世のゆゝゝ
なゝゝ年といゝゝふなゝゝゝゝくゝゝゝゝゝゝ稲葉の雫と

物衣

いふハ稲葉と雫とゝ乃ゝそいふ穂なゝゝと穂並ゝ又波
ゝゝゝゝゝもいふふの波ゝもゝゝゝゝゝ
とゝゝゝ世のゝよゝてゝゝゝ鬱ゝ似ゝゝゝゝゝゝ
しゝゝゝゝとゝ穂のなゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝとゝ穂ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ世の羽なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
〈きゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
千聲万聲無止時（やむ）とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

思もとらんなどしいふ和歌なるべし擣衣にハ恋をよそへ
又旅の心をいふハもろこしの蘇武といふ人胡国におゐて
年久しくとらハれしに其妻夫をこひて秋の夜さむ
なるころに衣をうちて夫のかへらんと待けり
其心を八月十五夜の詩に擣衣砧上俄添怨別聲 又擣
衣の詩に擣處曉愁閨月冷 裁将秋寄塞雲寒 とあ
るも蘇武が古事とつくれて詩し 又擣衣の夜のうらむ
るとよめるもおなじ詩よりいでし此外擣衣の恋をまとよ
みあるもあまたあり 今世の賤女いとく声ハ恋にちかくひゞ
らかおきてむかしをしのぶよしきこゆるものまつお
まさるおもひの種 秋さむしのとふらうも詩と

菊

九月九日

〽九月九日の宴ハさくらのむかふときなりけるといひ
又なかくの盃に千世とくみ知とも又ながつきのうたと
もよむべし

〽菊ハむかしのさうりいひしらぬとおりしろきんみといひ白ひの

かくさとはかなむにかざりて千年のよはひをのぶることく
ろなどと祝ひし山路のきくとて菊ハ仙境の花とほむさ
るゆへもあり菊の下水とよんで千年とのぶるといふハ
もろこしの南陽の酈縣といふ所の山に菊むらあまた有
其谷より流れ出る水をのめば寿し其流の末に三十餘
家の里あり此里人此水をのみて上寿を保ちしよし
文苑といふものにありと見ゆ又彭祖と云仙人菊の下
水をのみて長寿を保ちしこれらの古事によりてなり又
菊と白衣の縁によせてうたふハ九月九日陶淵明菊の籬の
ほとりにいたりしに王弘といふ人のもとより酒を送りし
に其使白衣を着て来りしことあり此古事によりて
菊に人よする時ハ白衣の袖などのことであやまされる
これちかくまであり菊の花し此事ならたとりし
袖をふれて探り其外星まれなる風なるにふんハ
花のごとし又むかしの宮といふハ菊ハ諸花の後に咲ゆへな

残菊

是ハしなのすともいふ桜ハ花のあるといふやし
よせの詞 咲 白 千とせ 下水 山路 のこる まれ かれ
一 残菊といふハ九月十日よりハすべて残菊といへども
なかよりむかふるハうつろひ残るんとまり秋の末冬の
初までも出さる歌し

紅葉

よせの詞 ふかき むら ちる 染 ぬれ 照 夕日 に
一 紅葉ハ秋のもみぢ もそめ しぐれ にもそむる よし ともあり 下葉
の山々も ちらし て錦 とみるゝ とくる に そめたるも 見なし なる
みなとの紅葉ハ千入の色さへ もとろみたるも 紅葉なし
八しほ入て葉ども して紅葉ハくれなゐ くらく ちらむと も 真
しく見えあり されど 好む にとよ いかしき 花 ハ 端山
より咲て 奥山ハ後に咲物し 紅葉ハおく山より 深
て端山ハ末に咲物し よりて 紅葉もおく山より 紅そむ
る物し 桜の紅葉ハうすき物し あるて 紅葉と いふハ
の木し 色ふかく そむる物しさかえし 紅葉する也

暮秋

の紅葉ともいふ 桜のわかきといひ木々の紅葉といひて
ハ紅葉といひても 紅葉し 暮秋とよぶ名とさえ
ぬし
よせの詞 秋 しぐれ 霜 ひろふ 暮 ちる 八入 八しほ
千しほ かつ とく 紅 葉散らす 秋のなごり 暮 れ
風さそふ ちる くれ
一 うつらひといひて おし秋ながら くるてなごり ハ おし
さんといひ 草紫の 紅葉 しもんより あさらの 月を
色ハいろ 桜の 紅葉も 色よ となれり の 色 暮 となりて
ての 秋も 秋 のさそし ハ 有明の 月乃 秋 なごり

残秋

志さよ みん なりて 紅葉し
よせの詞 ぐれて ゆか し むら ふかき うら 暮 れ
有明の 月 ハ そる れ 秋
一 暮秋より 残 しく 残秋ハ 今いくら くれ 残らんを
いふ し 暮秋ハ くれ 残る 秋 ども いよ 九月 晦日の 事を
もよむと

九月尽

九月晦日のこゝろをよむべし

暮秋

暮秋九月尽いづれをもよむべし 惜むこゝろを添べし

秋天象

秋の空ともいふ 秋の日数のくれやすきをいひ秋の夕暮の景色といひ草葉に露の置を よむも天象なり 又雲風霧煙なども秋をおもひてよむべし 此世の理は物ごとによりてかはるべし

秋日

秋の日は日影のさやけきをいひ又秋晴とも言や さやけきともよむべし

秋風

此世の理は新しきことを入てよむ 初秋の心なれば其の程ある野草の風もすゞしく荻涼し 身にしむなれどもあるべし 又萩の上風もいつとなく ことにしく松吹風もとりわけて涼べし ことに稲葉の 上を吹きを入ての身にぞよはきあはれあきらかに秋にふく せみ人の葉末の露をちらして袖をしめし おもひ秋風は

さむきにもふきしかば人のこゝろ木乃葉ちらんばなどいひ て風の音はさびしくあはれなりともいひ又は身にしみ てあはれとぞふくやうにもよむべし 此世の理は吹ば音つよく音はげしく身にしむゆゑに き雲ちる夜はひく草葉ゆらぎの八吹声なり

秋雲

雲はなびきて八重もしく秋は雲さへなにやらくらく重なりてむら しぐれは秋の雲とよむ也八重の時あるべし 折よせて かゞみしゆるべし 秋の初雲などよめば空高く細くよせの 理は冬の雲と同じ

秋萩

秋萩といひてむら芝には或は古萩乃明やらぬとかいひ又 は萩ちるのみともよみ又は月にあはせ萩とかいひて字 鹿の詠しの有名こそ本なりて御意の趣に よせて萩乃伝へつゆをやつよむべきなし よせの理は花やかなれど寂しひやさしひの言葉に 萩なの袖によせあはすべし

秋夜

一 秋夜ハ長夜のながき夜のやうに月をながめてねられねどふけ
悲しく秋ものさびしき夜なるをかなしとハ数字細大方ハ
むしの夜ともあり又秋夜も夕ぐれの声とよむ時ハかならずむしの
いかにも秋のむしの夜の感情なる所とおもふべし 又夜寒
木の葉のちるやうなるをもよミ又ハ旅寝などいひて秋のくれ
ともよむべきなし 夜ハ夜のよせに同し

秋時雨

一 時雨ハ冬なれども秋にもふる也 秋の時雨ハあはれをいひ冬も
ことばにてもよせ又草葉の色かはるなどいひ又ハ秋とことわりてよむ
ごとし 秋時雨といへバ秋の時雨なりとことにもあれど
冬の時雨にも秋時雨といへれハ時雨のしぐれハ秋おしむなれや
唐絵秋の時雨ハ秋の末又ハ秋の景気をふくしむなり此
冬の時雨ハ冬の景気をふくしてひがくして観の日
かぜやうにてしらぬを観とふくしてとハいふなり
よせの御集の色をハ紅葉を添えふかるハ時雨
ましかれとてまよふ風さひく

秋池儀

池儀にハ山類海類水辺野田いづれにても秋の景気を
よせてよむべしよせの所ハ物にまよひてよむハなし
紅葉の浮ミさせ景気秀のさくむすひ其外秋の
景気のごとくあるべしよせの観およびおよし

秋山

一 これ又秋山とよむに紅葉かあり有へし野の景物其外
ちる萩荻咲ミられ露ところせく野の秋ちりさき秋
又秋の末の心とよまバ秋萩の色ちらむさ苔の紫も添
うらがれてさびしき野べの景気といふべきしよせの紛

秋野

およびおもし

秋川

一 秋川とよむにハ何れも秋さびしき所又ハ水の影とう
つし岸の紅葉の流とひてし蒼川にハ紅葉をさそふ
野路の玉河にハ秋萩かうつるとも
よせの観おさびしき秋の水紅葉なかるゝ風気つる
をかの川にうつる影を氷へさし

秋水

一 秋水ハ秋川とよむに同しこゝし秋川ハ河とよみて秋水

ハ水とよむべし秋あゝ川とハかゝり後てハ川秋川ゝ
水とハかゝり後ても落紙ゝ水ハ水沼水池水い
ゝれとも後べし

秋桃　秋桃ハ又ハ野沢川いつくとても秋の氣色のかゝりゝ
さとをゝ見えとゝ色ハ紅葉ゝ色ハ紅葉ゝ色ハ
いとゝ秋

秋眞　秋の色ハ野一のちくさとゝ山の紅葉とゝ秋田ゝ稲
又ハ小の一の鹿とゝ秋ゝ月ゝ秋ゝ月ゝ秋ゝ月ゝ
いづれも色なるべし

秋植物　萩萩ゝ花とゝ秋ゝ一ゝ花とゝ秋の草木いろ
ゝ色ゝ一ゝ又ハ花とゝ秋ゝ色ゝ松枝の深とも

秋動物　虫鹿鳴とゝ秋ゝ牛馬ゝ色ゝ秋とむ
ゝ色ゝ

秋思　秋思ハ秋の感ゝ色ゝ秋ゝ色ゝ秋ゝ色ゝ秋ゝ色ゝ
ゝ色ゝ秋ゝ色ゝ

秋懷　秋思ゝ懷ゝ秋の懷ハ懷ゝ色ゝ秋ゝ色ゝ

秋色　萩の色ゝ鹿の色ゝ又自ハ秋のゝ色ゝ色ゝ色

いひ秋の田乃穂なみさうとうとして四ゆきかゆ民や
したゝらのめぐりてゝ〳〵くいく方代と孫〳〵又ハ松
竹乃うへ〳〵も秋とひとびてうひべーゝ世乃紅ハ掛し
ようべし

初冬

初冬

初冬ハ十月乃初乃心ともよこと又ハ冬きて立ち日乃ひと
たやこゝもうひべーゝ変乃あしもなさうハことけー
くふきこそのゝーさもいとハやおちぐれ本くのこのハも
変こぐれひくゝの好も表ぐれてひさ〳〵ハコなり
宮ハ多ひ乃水もいつーゝ世そも人ちぐさもうれ
秋のゝれつ〳〵秋秋と表れど打そうぎ沼絲の表も
くなりの表れとし

時雨

ゝ世の紅ハゝうハいつーゝと代ゝさ〳〵紅ゝも初雨
こぐれハ十月紅ゝようゝうゝ世ゝうゝ表ゝふくな
ゝてハゝゝゝゝ高ゝ表ゝこぐれハゝれゝりゝふゝ

らゝとゝさゝぐゝなゝくあゝれゝゝゝゝ

うくるとぬんのなうせる舟をいふハ舟と一緒といへ
ばし立田川よりながれ流もせきうをばうちうごゝれ大井
川みハくるといふもなつひやうよりの所 岸の石垣
ハ毎〳〵ふれども水ハ流らをとも又ハ近の石垣ハ岩岩
て人もうらうねかふこゝうる跡所 とも 磐石ハ秋よ
りくく 黄色とうあどおすまるせて 冬のりのし 落
紫衣とハ衣よりそくいつるし又冬の紫 葉のハ丸云
よせの初ちうの初ちうつりる落る 樹まづ 此さそふさ
そひもれ日を世 此よりぐるく かうく 黄ふうこのハるとう
うく

紫石楠

山陰 谷陰なりとよ 完ちうおりうるく 石楠花
紫とハ紫るあ紫やあるとうこ赤うんし 紫花
といふも紫花 紫の月一
よせの初ちうの初ちうの初 此まつれ 秋のうこ
萩萩 萩ゝなへ一の葉 ともよゝ又ハ冬 世く
茅 これの茅とも又ハ 桔梗 紫うくさ 桔の茅のこどう

定草

さむうくさともよりうの桔梗ひくくうくひうる 桔梗 紫
よせの初冬ゝ草 冬れ葉 冬れ 冬所 冬所 冬所
ちうそく 葉の 冬 冬 冬

杉

杉の葉もとそこ〳〵芽の葉は柳葉なゞらうこさかゝ
ーとがはもさかりかくらもひ水をの底もあつなかか
ゝるかなどこしれあしともあり
よせの新々そだれ杉だれつ葉おれかをれられる浦風
よさもぐくうれびと新る白波舟のはさきうなぬ

杉樹とかゝそだれの梢のさむさんし又松の梢の冬
うれ枝深よ杉乃おさろぐかゝ河てをさんとも
よせの新杉おれ冬そだれさむき梢梢ゝハ冴さゆう
杉ハ冬くりりなくさとうる杉ハあつつさの杉かう
ー古言みこ砂乃おのゝ乃ゝ冬の冬をとなりと後
るハ必杉秋よハ鶯乃春をこうりてさやうなる秋
杉秋のつうとハ秋ハつゞくさ乃杉といとひてをさうに
ゝうくこと乃ゝ枝しまかゝ冬むゞーうもつゞくとう
枝とくよ秋ふくさ杉ともり秋やの新ア冬新杉の
ふくきと初春ゝとうゞゝ冬の春紫もあとれくうゞれ

氷

くさ初の春秋の新りかくふとハ月新よとくう春のい
りかりとくよ春くりりとハ春ふくおくをこゝぬれハ春
のくくくやうかだとおくりゞ抱く春乃花とハ春の芝
紫よ新をるせうゞ花のやくくゆるくりとゆひの春
とハ白髮とくふうらの春も用ー春のふりかとハ春
のふりくゞ春くゞ春とハ松の紫萩芦葦の稻花春の
春よくほりてとうあひくるく春くやゞくとハ行の紫
萩の紫み春とかばくやくくと春のあるゝ抱し
よせの初氷むもとぶかうふ新をるふ氷をくさやゞく
こゆるくかうハ白冬かさむきさゆるかうれそう冬河ゞさ
接乃冬メさ冬ゝ

冬と接よハあうハ屋乃池ゝもこうりぬれ水をもそれ
あくゞれよをくて後ぬ滝の糸もと新ハ冬よくうて春
れく松風乃声のこおるくーといひあうハ河水のうと
むくをくう冬ゝてやせの波かりおくとともをハの水波

よ歩のうへとうらうみとこゝあるハ芝ハのうら波（信濃国ハ名所ハ歩あ
つくして氷のうへとゝもゝとゝいうりゆくゝゝ
なりぬれハ孤きゝうて波り物るとして人もゆくゝゝ
孤ワてゝゝ波ゝよハゝゝゝゝるなゝ素ゝなりて歩くゝ
くなりぬれハ又孤のゝるとゝてそれゝゝ人ゝゝゝとと
なん（寺林良枝）ゝゝゝゝゝゝゝれと歩の物歩のゝゝ乃通路なゝゝゝゝゝ
ゝゝ乃近ゝの湖氷なゝゝゝゝゝゝ波波ゝゝゝゝゝゝ入ゝ
なゝゝゝゝゝゝゝ

水鳥

きんどりあり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

氷魚ハちいさきうをの白きをさしてあれはなほ又
月毛なほうぶけ毛ともあり
うせの羽ひとのぢるひとのうぶけ毛ハうぶけ毛
いざうの毛ハ宇治川 久伝なし 田上川 日上 吉野川 日上

鷹狩

えぞとも又ハ雪のまりの色ともこまうぬ也又ハ
ぐどうりくしてその日の程なきとあしもころ
の羽乃とをとをきるいをきひめともりバのせこもに
れあるうとしもいふ鳥乃羽ハ不可勝斗ハよ
せの羽の中ハ黒き波
うせの羽ハしろ黒の羽ちゝ毛乃さゝ
うの日やうの物のさ尾のふ矢の羽ハ似ゝ又ハ
きとれ 茅とうの屋形のひのちりハ似さ
くさの中ハ色のくれるとをろ鈴ハ又ハ
らうし義いとうゝ

祈禾

のつゞさ 稲の穂とり
おゞさの穂尾のくさ
のちぐしふ いとぐちの穂
よゝつゝそゝ 稲の穂
のゝさゝ 穂
とゝりて 禁義
くさゝ
ありゝいゝ
祈禾ハ冬の秋社
てその穂
うゝひまひろ
本法ゝ祈禾乃
乃ゝこのゝ
ハゝれゝ
うせの羽

とゝ 稲
ひつきゝ 日し
ゝけの
ゝ
ゝ
ゝ

うゝふ月さうきびくゝ　ふ月さく　ゝ　ふ月りとも　ふの声月
ハくゝくゝくゝくゝの　ゝ　ゝ　ゝ

雪とは雪乃つゞきてふんとしてはおよりうろ雪の消
ぎして又ゆき雪をゆきとゆきとは深きこゝを
し物して雪よはゆきの事なりてあげるなるゆきとあり
ゆせの朝ゆきかりつりからかりうろかきうてをかきうこ
きてゆうへうづひあと絶ふ松の下わ所の下おれ入迷ふ
光よりすぐふ波よりすぐふ所よりすぐふかうこゝうろ

炭竈

もとうろ風は山のうろうこそ又は雲そもあるとゆりうゑとゆり
てこゝこゝぐと雪入て炭よやくし煙の立のあれこゝ雲
とうこそうりうこゝやりうろ所とよむこゝ雲のつうこゝは
はうこゝうりも雪くこゝらよこゝうこゝとよりうふ雲ふ大雪
ふんうこゝこゝうんふし戎は年を松の本ろうり一もうぐり
立のぐりう煙とこゝ雪のうゑ煙これひくこゝも又は煙乃
来は雪げの雪こゝうこゝもうり

ゆせの朝ゆきふりゆきうりつひうりうこゝひこゝ年
さむこゝうこゝさうこゝうこゝふ雪ふ絶なうこゝ大雪二日

埋火

うつゝ火はこゝ雪乃ゑとなり埋火のあこゝうゆうゆ
こゝりは雪乃んゆをとゝもいひあうこゝきゝこゝうつこ火も
消て祇さひこゝきりーなとゝひうこゝうつこ火の雪こゝうゑ
こゝうりこゝうゑゝこゝ雪ゑこゝこゝこゝいふこゝこゝこゝとこゝは
火とおこゝ消とんとおこゝもこゝゑなゝこゝこゝていふ消こゝのこゝ消
こゝ火とこゝ消こゝ雪なこゝこゝこゝ木のほこゝとこゝひゑこゝこゝうつこ
こゝうこゝとりこゝ

炉火

ゆせの朝ゆきひとこゝうこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ火の
こゝうつゝ火は月ーこゝ炉火の歌は雪こゝうつこゝひこゝこゝ

椎柴

椎の木乃柴こゝ雪ゑ柴は柴ゝゝゆせをーこゝこゝこゝうこゝこゝよ
ーこゝこゝうこゝうこゝひこゝ雪乃こゝうこゝこゝ雪ゑ雪のこゝ
こゝ雪又は雪打こゝこゝひこゝこゝこゝーこゝこゝこゝ
ゆせ乃朝ゆきこゝこゝこゝ柴こゝゆせこゝこゝこゝこゝ

炭

ちつぶこゝ乃ゝ乃ゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこ

年のくれ

年のくれ

年のくれ

はじめ八七月と極月と年はてゝ人とゝのうるこ
ろし今は七月ばかりなれてはやかぜ
ゝの初はつゝ
めとぐめえぬ月日なれて年はてゝ
ゝ
ゝ

有明の月雪よさそれびく嵐のうへ雲又はをの秋さう
のうづみ火も灰ぐらはなれるなとうたせ
うせの朝福を横たへ有明の月より夜入るの秋
雲乃峰なの雪乃所はのなどうもひべし冬の秋さの
京それうとうとぐあるべし

冬嵐

冬地儀

山飛波を水色いづれもうもひべし雷雨雨雪嵐かど
八天象なれどうやうの数とうゝ入とりてはの意乱も
水色乃雲乃雲もいひるべがこれはせてうもひべきうや
それも山とうもひよはの陰とうく光入てうらうはよハ
天象植物雜物等ともうゝ合もべし

冬雨

冬風

きぐれなどお意し又村雨はうばくとひとべし

冬鳥

うせの朝秋さむきふうはお意し雨雪雨雪ともう
千色水色の冬秋の鹿其外牛馬猿鶴さゝもべかれべ
ひよも冬とうせてうもひべし

冬鐘

雨雪よさしのあるつさかよ夕くり乃雪まのぐくあ
のうなとなうるべし

冬雪

うせの朝ひぐくかぞ声色うの嵐さそう
ちしのとうとうひ乃声千色水色乃かくねあれもそれ
のとうとうもひべし

冬木

冬山

冬海

冬川

冬雪の枝又松板雪とおひてもうもひべし
冬雪の山乃雪乱のさいさん又雪雲もそれ雨雪
とうせてうもひべし地儀より
沖つ波も雪ふりぬれハ白あるよしうの岩やうの川
のれのりかの乃雪まのびくとも又ハ雪よ立と
うとも風あるべし波色乃れハ沖の舟もかれさ乱
乱なとうとくあるべし又ハよ色なとも波べし
うせの朝波色さ波ちくさ波乱さむきちぐう
川の波も色さびく又ハ波よとうるとも波ハ千色水
色とうとうへし又宇治川田上川よハちぐろとうもうゝ

淀川むづ川よハかづけ川よりをつる人と漁もをる川の魚とれ〻

祈なるべし

冬の月ハ千年を水を其外鶴鳴もをる村をこゆもをとも

むとびてよひ〻

冬歌

冬の鹿牛馬猿乃鳴ゆもをとむとぶ〻

冬旅

秋の山のこひとをとゝ字はの山乃てゝれ雨乃をゝれ〻

のゝ中山ゆさしてゆかなづを不二のを根も雪乃をれの〻

よハ風くゝり草を枕をゝれ乃いとくゝひねの夜も

浦ハとを松乃根枕ゆをゝ風路のをゝびハかりつゝ

雪乃路とをしなひたをゝをゝはもゆかなつゝんれどあり

冬祝

しらせ乃初ハ新の祝乃旅よおゝ

松乃ゝゝゝゝハ雪をとりて千年乃をとゝゝゝ

雪乃をゝなるゝ〻をゝ年といゝ〻ひ雪乃ゝ〻をゝ乃つゝゝ年

其外冬の系抽ゆも後をとせをゝをとゝゝ耕作ゆゝゝ乃ゝとゝ

らせ乃初祝の新よ公

初学撰 弐三終